
DEAD・END・RUNNING ~アナザーストーリー~ (休載中)

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAD・END・RUNNING 〈アナザーストーリー〉
(休載中)

【Nコード】

N7382E

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

日本のE県にある森木町。その町ではケイ達の街より先にゾンビが現れていた。果たして、死者の蠢く町から練とトモは逃げる事が出来るのだろうか……。この作品はDEAD・END・RUNNINGとリンクしていく予定です。そちらも読んでいただけると面白みが倍増するかもしれません。しばらく休載します。ホントすいません。

しばらく休載し

プロローグ：「状況を開始する。」（前書き）

え、別の作品のストーリーを考えていたら、こういう展開もいいかと思い書いてみました。この作品は「DEAD・END・RUNNING」と後々リンクしていきます。

後から後悔する確率が高いですが、きちんと完結まで持っていくのでどうか応援してください。

プロローグ：「状況を開始する。」

日本のE県にある森木町。四方を川に囲まれているこの町にある唯一の駅に、電車が入ってきた。

普段なら誰も降りてこないことすらある時間帯にもかかわらず、今日はやけに騒がしい乗客が降りてきた。

スーツ姿の男女が3・4人ほど降りてくる中、1人の学生服を着た少年が勢いよく電車から飛び出した。

髪を金髪に染め、耳にはピアスマで付けている少年は電車から出ると大きく伸びをした。機嫌がいいのか、常に笑顔を浮かべており、整った顔からは子供のような無邪気さが現れていた。少年が伸びを終えると、電車からもう1人学生服を着た少年が出てきた。

もう1人の少年は、ショートカットの黒髪にそれなりの顔立ちをしていたが、今は疲れた表情を浮かべていて、どこか大人びた印象を受ける。

金髪の少年は黒髪の少年へ顔を向けると、上機嫌のまま不満を漏らした。

「お〜い練早くしろよ〜。」

「ちょ、待ってよトモ！ 電車から走って降りたら他のお客さんに迷惑だよ〜！」

「いいんだよ！ そんなことは駅員が気にすることで俺が気にすることじゃねえ！」

「今の台詞に僕は含まれてなかったよね！？ じゃあ僕は気にしないといけないんだ〜！」

「うるせえぞ練！ 周りに迷惑だろ〜！」

「あ、ごめん・・・って何自分のこと棚に上げてんのさ〜！ 僕よりまず君が謝るべきでしょ〜！！あ、コラ逃げるな〜！！！」

練と呼ばれた少年は、駅構内へ続く階段を駆け上がっていったトモと呼ばれた少年を追うため自分も走りだした。

「トモ！ 階段は走ると危ないよ！！！」

「ハーツハツハツハ！ この俺が階段ごときで・・・ぐお！？」

「ほらみるこけた！！！」

階段を2段飛ばしで駆け上がっていたトモは、足を段に引っ掛けてしまい、無様にこけていた。

練はすぐに駆け寄ると、手を差し伸べた。

「ほら、掴まりなよ。」

「お～～心の友よ～～」。

「意外と似てるねそれ！？」

トモの意外な才能に驚きつつ、練はトモを立ち上がらせてやった。今度は普通に階段を上がっていくトモの横に並びながら、練は平日の真昼間にも関わらず自分が住んでいるところから電車で30分掛けてここまで来た理由を改めてトモに尋ねる。

「ねえトモ。本気でいると思ってるの？ ゾンビなんて・・・。」

「それを確かめるためにこうして来たんじゃないか。練だって気になんだろ？」

「僕はどうでもいいよ。近所で起きてるならともかく、こんな離れた場所で起きてることに興味なんて無いし。」

「ありゃ？じゃなんで来たんだ？」

「トモが無理やり連れてったんじゃないか！！！」

改札口を出て不思議そうな顔をして尋ねてきたトモに、練は思い切り怒鳴った。

駅員が迷惑そうに練を睨んでいたが、不満が爆発して興奮している練は気づかなかった。

「授業中にいきなり君が『ちよつと出かけるぞ!』って言って僕を連行したじゃないか!! しかも理由は電車内で言ってくるし、もう散々だよ……。」

段々と声がしぼんでいく練を見て流石に悪いと思ったのか、トモはすまなそうな顔をして彼の肩に手を置いた。

「悪かったよ。お前しかおもしろ……信用できるやつがいなかったんだ。」

「今面白そうって言いそうになったよね!? そうだよね!?’

「さあ、気を取り直して行こうぜ。」

「何気に話をはぐらしてるでしょ!? そう簡単に……。」

話をはぐらかそうとするトモになおも食いつこうとするが、そのとき練を肩を誰かが叩いた。不思議に思った練がそちらを向くと、額に青筋を浮かべて乾いた笑みをこちらに向けている駅員がいた。

ニツコリと笑っているが、目が全く笑っていない駅員を見て、流石のトモも顔が引きつっていた。

「……どうしよう?」

「……アレしかねえだろ。」

トモが話し終わると同時に練は肩を掴んでいる駅員の手を振り払い、トモと一緒に走り出した。

駅員が何かを叫んでいるようだが、2人は完全に無視して走り出した。

「も〜なんでこうなるんだよ〜!!」

「はは、いいじゃねえか楽しくてよ!!」

「それは僕を巻き込んでないときに言え〜!!!!!!」

。 練は全速力で走りながら叫ぶ。自分の運の無さを嘆きながら・・・

こうして、一介の高校生である宮田友和と、その友人の井上練はこの町へと降り立った。

・・・これから始まる惨劇を知らずに・・・。

練達2人が駅前で壮絶な追いかけてこを繰り広げているのと同時刻。迷彩服を着た集団が練達がいる町のとあるビルの裏口に集まっていた。

彼等は皆銃器で武装しており、明らかに堅気の間人ではなかった。

「後5分……。準備はいいか？」

リーダー格らしき大柄な白人らしき男が、時計を見てから英語で仲間に確認する。

男と同じ迷彩服を着た集団は、一切声を発することなく、頷くだけで肯定を示した。男もこの作戦が極秘のものだと知っているため、それ以上声を出すことなく頷き返した。

彼等の目の前には「田舎よりは賑やかだが完全に都会というわけでもない」程度のこの町には似つかわしくない大きな白塗りのビルが建っていた。

「しっかし、何でまた俺らがこんな島国で作戦こなさなきゃならぬのかな。」

集団の最後尾で周囲に目を光らせていた褐色の肌の男が疑問を口にする。

彼等が今回与えられた任務は、このビルに存在するとある物と、それに関係する資料等の処分だった。

いつもなら世界各国の様々な場所でテロリストや戦争犯罪人を追いかけている自分達に、こんな妙な任務が回ってくることに疑問を抱いていた。

そのまま思索にふけっていたが、不意に隣から注意を受ける。

「トウジヨ、そろそろ時間だ。考え事はよせ。」

「へいへい。」

集団の中で唯一女性と思しき人物から注意され、トウジヨと呼ばれた男は思考を中断させた。

ここからは雑念は隙を生む。隙を見れば自分はおるか仲間さえも危険にさらしかねないのだ。ならば絶対に隙は見せない方がいい。

トウジヨは完全に戦闘態勢に入ると、リーダーからの合図を待った。

集団の先頭にいるリーダー格の男は時計をじっと見つめていたが、やがて顔を上げて作戦開始の宣言をした。

「ヒトフタサンマル1230、状況を開始する。」

そう言うと、彼らは目の前のビルへと突入していった。

これは、複雑に絡み合った糸の一本。

やがてこの糸はもう一つの糸と交差するが、それはまだ先の話だ。

第2話：「それで、どこに行くの？」

「くはあゝ～疲れたぜ～。」

「凄いしつこかったからね駅員さん……。」

僕は今、鬼の形相で追いかけてきた駅員さんを何とか撒いて、喫茶店で休憩しているんです。いやあ怖かった～。あの人絶対ヤクザかなんかだよ……。ドスっぽいの振り回してたし……。

「ミルクティーのお客様。」

「あ、はい。」

僕が先ほどの逃走劇を思い出していると、ウェイトレスさんが僕の頼んだ飲み物を持ってきてくれました。

トモは目の前でオムライスを凄い勢いで口に運んでいます。いや早え早え。スプーン見えないや。

「ふう……。ごっそさん。」

トモはオムライスを食べ終わるとコップの水を一气飲みして、そのコップをドン！と置きました。

「さーて、んじゃそろそろ調査を始めつか。」

「急だねホントに……。まあいいや。それで？まずどこに行くの？」

もう僕はこの時点で逃げることを諦めていた。逃げたら明日鬱陶しいからね。

「そつだな・・・ちよつとコレ見てくれ。」

そう言うとトモは学ランの中から一枚の紙を取り出して僕に渡してきた。取りあえず受け取ってみるとこの町の地図のようだが、幾つかの場所に点がついていた。

「どうやらこの点はなにかを示しているみたいだけど、何を示しているかは分からなかった。」

「これは？」

「今までにゾンビと思われるモノが目撃されたところをピックアップしてしてみたんだ。」

「・・・トモってこつというのはマメだよな。」

「ふふん、まあな。」

コラコラ偉そうにするな。いつもは面倒事は全部僕押し付けてくるくせに。とまあ心中でそんなことを思いつつ、地図をよく見ている。

地図に描かれた点は町の東側に集まっていて、良く見ると町外れのとある建物から町の中心部へ、つまり人の多いところへと点が向かっているのだ。

「ねえトモ、これって・・・。」

「気づいたか？ゾンビが最初に目撃されたのは、この建物のすぐ近くなんだ。」

トモは町の東にある建物を指差した。地図には「戸塚研究所」と書かれているその場所は、やけに土地面積が広がった。

「随分広いね・・・。」

「なんでも動物実験やるためにここまで広くしたらいいんだが、何

をやっているかはさっぱりなんだ。どう考えたって怪しいだろ？」

確かに……。研究所の面積はかなり広い。ただの研究なら普通のオフィスビルでいいはずなのに、大手の工場並みの広さがある。これだけの広さで行う実験とは一体……。

って何真剣に考えてるんだ僕。ゾンビなんているわけ無いだろう。そこで、ゾンビ以外の可能性を考えてみる。

「ねえトモ。そもそも何で目撃されたのがゾンビなの？ 暗闇で浮浪者を見間違えた可能性は無いの？」

「ああ、それなら俺も調べたんだが、どうやら目撃者の1人は街灯できちんと確認してるんだ。そいつが見たヤツは片目が飛び出ている、喉が無くて中身が見えてたらしい。」

「うわああ……。」

僕は目撃されたヤツの話聞いて気分が悪くなってしまった。自分なら当然だと思う。僕は特別肝っ玉があるわけではないのだ。あまりこういう話に慣れてるわけでもないし。

なので、話の流れを少し変えることにした。

「じゃあ、警察はどうしてるの？ これを見る限り目撃数は二桁はあるし、幾らなんでも巡回ぐらいはしてるでしょ？」

「一応軽い調査はしてるみたえだが、いかんせん目撃されたものがゾンビなんて疑わしいモンだし、被害報告も無いから本腰入れてやっってるわけではねえな……。」

まあ警察は確実な証拠が無いとまともに動かないからね。このぐらいが関の山か……。

僕は気分を戻そうとミルクティーを飲んだ。甘さが程よく抑えられていたため、不快感を抑えることが出来た。

とりあえず、今はトモに付き合っただけであらうかな。しばらく探してみれば、何もないうちで分かって帰ることになるだろうし。

「それで、どこに行くの？」

「まずはここだ。」

トモは地図上で中心部に近い場所を指差した。近くにはゾンビが目撃された印である点があった。

「何でここなの？」

「つぎは研究所の近くに行くと思ったのに……。」

「研究所は警備が厳しいらしい。だからまず、噂のゾンビがホントにいるかどうかを確かめる。」

「ああ、だからそこに行くんだ。」

ゾンビはどうやらこの町の中心部に近づいているらしい。なら、最後の出現場所から少し中心部に近い場所を調べれば見つかるかもしれない。

恐らくトモはそう考えたのだろう。彼は得意げな表情を浮かべていた。

「そういうことだ。んじゃ、そろそろ行くぞ。」

「えー!? もう!?!」

「全は急げっつーだろ。ほら早くしろ。」

「ちよ、待ってよー!」

こうして僕らは慌しく喫茶店を後にした。うっ……、他のお客さんが白い目で見えてきたよ……。

「おわ!？」

「おいおいまだ居たのかよ……。」

俺ことトウジヨは今、研究所の地下に作られた施設の中にいる。

目的のブーツを探していると、奥の曲がり角に潜んでいやがった警備員がM16A1を連射してきた。

一緒に行動している俺とチームメンバーのイワンはすぐに近くの部屋に隠れ、飛んでくる銃弾から身を隠す。

いい加減にしてくれよ……。これで何回目だ？

俺達の部隊は研究所に入ってすぐ、銃で武装した警備員が歓迎してくれた。

警備はそれほど手強くない、全員無傷のまま返り討ちになっていた。そのため、チームは2人づつに分かれて探索をすることになった。しかし……。

「いくらなんでも多すぎじゃねえか!？」

「知るか! とにかく片付けるぞ!!!」

俺はイワンと母国語の英語で軽口を叩きあいながら、ゲームのザコキャラみてーにゾロゾロ増えてく警備員どもにXM8をぶち込む。今回の任務で初めて使うこの銃は、反動が少なく命中精度がいい。

たった今こっちに向かって来ようとした2人の警備員は、それぞれドタマに2・3発ずつライフル弾を食らい、血と脳漿を後頭部から勢いよく撒き散らしながら倒れた。

しかし、まだ曲がり角の向こうには残っているらしく、この部屋の入り口近くの壁にコンクリの破片を飛ばしながら銃弾がめり込み、壁に穴を作っていた。

ま、こんな感じに、どこに行ってもこいつ等が出てきて邪魔をしにくんだよ……。

「あゝもう鬱陶しい！」

「一掃する！グレネード行くぞ！」

イワンはタクティカルベストにつけていた手榴弾を1つ取り、安全ピンを外す。これはピンが外れてから5秒で爆発するタイプだ。しかし、イワンはすぐには投げない。

残り4秒。俺は通路の向こうから連中が出てこないよう銃撃を加える。

残り3秒。イワンはまだ動かず、俺もそのことに気づいているので銃撃を続ける。

残り2秒。イワンは部屋から身を乗り出すと、勢い良く手榴弾を放り投げる。俺はイワンが投げるとすぐに体を部屋に引っ込める。

残り1秒。イワンが同じく部屋に入り、警備の連中が転がってきた手榴弾を見て慌てた声が聞こえた。もう遅いがな。

0。手榴弾が爆発した。部屋の外からは爆発音が聞こえ、爆発音が止むと、何の音もしなくなった。

俺とイワンは顔だけを出して通路に誰も立っていないことを確認すると、俺が前、イワンが後ろという配置になって、XM8を構えながら曲がり角へと向かっていく。

曲がり角に來ると、イワンを少し後ろで待機させて、俺は一度壁に張り付いて立ち止まり、素早く顔を出して連中を確認する。

曲がり角の向こうには、血が大量に飛び散っていた。

どうやらモロに食らったらしく、2人が即死していた。全身に手榴弾の破片を食らい、体はずたずた。腸が見えているヤツもいる。警備員達は床や壁に血を撒き散らして、自分の血で作られた血の池に沈んでいた。

「う……ぐ……。」

一番奥にいた警備員が苦しそうにうめき声を上げた。どうやら奥にいたため即死は免れたらしい。しかし、胸に重症を負っており、しばらくしたら死んじまうだろう。

俺はそいつに近づくと、そいつの頭にホルスターから抜いたスプリングフィールドXDを突きつける。XDに付けられたレーザーポインターが、そいつの額に赤い点を写す。ま、最後のお情けってやつだ。

「許せなんて言わねえよ。ま、地獄で会おうや。」

俺は英語でそう言うと、引き金を引いた。発射された9mmパラベラム弾が、男の脳を掻き回し、後ろから飛び出す。男は頭部の後ろろ両方から血と脳らしきものを垂れ流し、動かなくなった。

「……終わったか？」

後ろからイワンが話しかけてくる。律儀に終わるまで待つててく

れたのか。

「ああ。とつとと行こうぜ。」

「そうだな。」

短い会話の後、俺達は先へと進んでいった。その間、俺はずっと疑問を感じていた。

本来なら警備といえど日本では銃の携帯を認められていない。なのにここの警備員は全員銃を装備していた。しかも旧式といえどアサルトライフルまで。

それに、俺達が動くほどのブツとは一体なんだ？

浮かび上がってくる数々の疑問。それはトウジヨが長年戦場で培ってきた第六感が危険信号を鳴らすほどのものだった。

「くそ、イラつくぜ……。」

「……。」

俺が漏らした言葉に、イワンは何も言わなかった。こいつも感じてるんだろう。俺と同じことを。

俺は目の前の通路が、何か得体の知れないバケモノの口に見え、この先に何があるのか、少しだけ不安に思った。

少年達は表の悪夢と。兵士達は裏の悪夢へと近づいていく。
それぞれがその先の災厄に気づくことなく……。

第2話：「それで、どこに行くの？」（後書き）

うう・・・。。。戦闘シーンが上手く書けない様・・・。。。
感想・評価・アドバイスを待っています。

第3話・表：「おいおいマジかよ……。」

「ねえトモ……。」

「何だ練？」

「もう15分ぐらい歩いてるよね……？」

「あゝもうそんなに経ってたのか……。」

「さっきからゾンビなんて全く見ないよね……？ いい加減キレてもいいよね……？」

僕とトモは、喫茶店から出てすぐに目的の場所、つまりゾンビが出現すると思われる場所へと向かった。幸いその場所は喫茶店からさほど離れておらず、僕らは歩きでたどり着くことができた。その後、こうして周辺を歩き回っているのだが……。

「ゾンビどころか人間すらいないじゃん。どうなってんだ？」

そう、今この場には僕とトモ以外誰もいないのだ。確かに今の時間、外に出てくる人は滅多にいないだろう。しかしそれでも一人見かけないのは異常だった。

まるで、この町には人間が居ないかのよう。

無論そんなことはない。今僕達がいるところの周辺には家が隙間無く並んでおり、時折生活音が聞こえてくる。

しかし、ほとんどの家屋が塀で仕切られているため、中の様子を確認することは出来なかった。

先を歩くトモを見てみる。いつも彼が浮かべている余裕の表情だったが、良く見ると僅かに表情が固かった。どうやらトモも町全体から感じる異様な雰囲気を感じているみたいだ。

「……一体何なんだろうねこの町……。」

「さあな……、多分一連のゾンビ騒動と関係があるんじゃないかねえか？」

「そうかも……。でも、そんな曖昧な情報でこんな空気になるのかな？」

「分からねえ……。」

この町には何かがある。僕はそう確信していた。でなければ、こんな何かに怯えるような空気にはなっていないはずだ。

しかし、今の僕にはどうすることも出来ないし、何より僕らはゾンビ騒動の真偽を確かめるためにここに来たのだ。そんなことを考えに来たわけではない。

そんなことを考えていると、いつの間にか住宅街から様々なビルや建物が立ち並ぶ場所へと移動していた。

「……ん？」

その時、突然トモは怪訝そうな顔をして立ち止まると、周囲をキョロキョロと見回しはじめた。

「どうしたの？」

「いや……何かか聞こえたような気がしたんだが……。空耳かな？」

？ 僕には何も聞こえなかったけどなあ……。取りあえず耳を澄ませて見るけど、特に変わった音は聞こえてこない。寧ろ静か過ぎる。

「何も聞こえないけど……。どこから聞こえたか分かる？」

「確か……。あっちだった気がする。」

僕の問いに、トモは建物同士の隙間で出来ている路地裏を指差した。・・・何かいかにもヤバイことが起きそうなところだよ・・・。

「取りあえず行ってみつか。何かあるかもしれねえし。」

「個人的にはここで待っておきたいんだけど・・・ダメ？」

「ダメだ。ほら行くぞ。」

トモは僕の首根っこを掴んで無理やり一緒に連れて行くことす。いや、抵抗はしたんだよ？でもすぐに降参するんだよ・・・僕・・・。

迷路のような路地裏を歩いていく僕達。ここら辺はどつやらビルが多くあるようで、乗用車がぎりぎり通れそうな路地は結構長く続いていた。

僕らはゴミ箱や立てかけられている木の板などを避けながら、路地を歩きまわった。

「トモ？ 何かあった？」

「いんや、特に変わったものはねえなあ。」

「・・・僕は君が持つてる食いれ人形がとても変わってると思うんだけど？ ていうかどこにあったのそれ？」

確か大阪のどこかに保管されてるんじゃないかなかったつけそれ？

しかし、トモは僕の指摘を笑って流した。

「あつはつは、気にすんな。その店の裏口に置いてあったんだ。」

「戻してきなさい。今すぐ！」

「えっせつかく持ち帰ろうと思ったのに。」
「いいから返してきて!!」

トモは物凄く残念そうに食いね形を返しにいった。そんなのどうやって持ち帰るつもりなんだ。確実におまわりさんに捕まるって。

トモが人形を返しにお店の裏口に行っているとき、不意に僕の耳に何か音が届いた。

「ん？」

空耳かと思いつつも、一応念のために耳を澄ませて見る。するとどうやら誰かの声のようだ。離れた場所から聞こえているのか、よく聞き取れないけれど人の声だということは分かった。僕は急いで名残惜しそうに人形を見ているトモを呼んだ。ていうか何やってるの君は。

「ちよつとトモ来てよ!!」

「ん？何だ？」

「いいから耳を澄ませてよ！早く!!」

トモは僕の必死な様子を不思議に思いつつも、周囲を音に聞き耳を立てる。すると、瞬く間に表情が険しいものになっていった。

「この声……一体どこから……。」

「この狭い路地で聞こえてるって事は路地に誰かいるってことじゃないの？」

「多分そうだろうな。……こっちか！」

僕の推測に頭を四方に回転させてながら賛成すると、トモは突然

とある方向に耳を傾けたまま固まり、次の瞬間にはその方向の路地の奥へと走り出した。どうやら様々な方向に耳を向けて僅かな音量の違いを探っていたらしい。

「ちよ、待つてよトモ!!」

僕はどんどん離れていく彼の背に追いつくため、必死になって足を走らせた。

ゴミや色々な物を蹴飛ばしながら、僕らは路地裏を走り抜ける。

トモは時折立ち止まって周囲に耳を傾け、音のする方向へと向かっていく。

しばらく走っていると、段々聞こえにくかった音がはっきりと聞こえてくるようになった。でも待つてくれ。この音って……。

「どこか!？」

トモがある建物の前で立ち止まった。そこはどうやらとあるビジネスホテルの裏口らしい。もう音もはっきりと聞こえていた。

その音とは……。

「なあ練……これってよ……。」

「……女性の喘ぎ声……だね……。」

そう、僕ら在必死になって追っていたのは、ビジネスホテルから漏れている、え〜と(自主規制)の音のようでした。

ていうか、防音設備しつかりしろよ。モロ聞こえてんじゃん。

僕達2人はホテルの裏で卑猥な音を聞きながら、物凄い脱力感に襲われたよ。2人共肩落としてたし。

「トモ……ここに襲撃掛けちゃダメか？」

「……僕も同じこと考えたけど、止めとこつ。やったら凄く悲しくなる。」

「……そうだな。」

恋人いない歴〃年齢の僕らは背中に哀愁を漂わせながら、ホテルに襲撃をかけるのを必死に我慢しつつその場を後にしようとした。畜生、防音ぐらいしっかりしとけよ。マジでへこんだよこん畜生。若干やさぐれた気持ちになったとき、路地裏から誰かが歩いてきた。酔っているのだろうか、随分と覚束ない足取りでこちらに向かってくる。相手の顔は日陰にいるためこちらからは分からないが、僅かに見える作業服から男だと思われた。

「ん？ おいアンタ！ こんなところで何やってんだ？」

取りあえずトモが声を掛けてみるけど、路地から出てきた誰かは全くの反応を見せない。ただこちらに向かってくるスピードが少し速まったように感じた。

僕の直感は、こいつは危険だと叫んでいた。

「ねえトモ……おかしくない？」

「ああ……。幾らなんでも無反応はおかしいな。ちょっと用心しとくか。」

そう言つとトモは学生服の内側に手を入れると、中から棒らしきものを取り出した。それを軽く振ると、折りたたみ式になっていた棒は全長をのばした。

「それ警棒じゃないか！ そんなのどこで……。」

「ネット通販って便利だよな。」

通販で買ったんだ！ 皆さん今なら10%オフでお得ですよ！買わないと損ですよ！！

・・・ツハ！ どうやら現実逃避をしてしまったらしい。僕は頭を振って気をしっかりさせると、トモと一緒に近寄ってくる男を見る。

男との距離は大分狭まっていて、僕らはようやく男の顔を拝むことができた。

そして、すぐに後悔した。

「ひい！？」

「おいおいマジかよ・・・。」

何故なら、男の顔がとんでもなく腐敗していたからだ。

右目は眼窩から飛び出しており、色も黄ばんでいた。全体的に土気色の肌をしておりだらしなく開かれている口は歯が何本か欠けているのが見えた。

喉と頭部の一部が無くなっており、特に喉の傷は喉仏をまるごと無くしており氣道が見えるほどの深さだった。

「と、トモあれ・・・。」

いつの間にか、僕の声は震えていた。始めて見る本物のゾンビに、僕は恐怖していた。

ホラー映画で出てくる怪物が、もし本当に襲ってきたら？ もし想像上の生き物が突然現れて襲い掛かってきたら？ そんなことはありえないと笑う人が多いだろう。でも、今僕の目の前には動く死体がいる。そして恐らくは僕らを獲物として見ているのだろう。

すぐにでもここから逃げたいと思う。けど、僕は何とかそれを思い止まる。何故なら、僕には頼もしい友人はいるから。

トモは油断無く男を警戒しつつ、手で僕に下がるよう合図する。

僕は少し下がって周囲の警戒をする。

トモは警棒を右手に持つと、雄叫びを上げながらゾンビへと向かっていった。

「オオオオオラアアアア！！！」

トモはまずゾンビの足を警棒で払った。膝を横から殴りつけられゾンビの膝からは鈍い音が聞こえ、ゾンビはそのまま地面に倒れた。しかし、膝を割られたにも関わらずゾンビはそのままトモの足を掴み噛み付こうとする。無論トモも黙ってはいなかった。

トモは警棒を逆手に持つと、ゾンビの頭へと突き立てた。柄尻に手を当てて威力を増した警棒は勢い良く刺さり、血を出しながら深く沈んでいき脳を破壊した。

トモは無理やり表情を消した状態で警棒を引き抜く。ゾンビは僅かに痙攣していたが、警棒によって開いた穴から僅かに血を流しながらゆっくりと動かなくなっていった。

僕は周囲を見回して他に怪しい影が無いか確認して、トモへと話しかける。

「大丈夫トモ？」

「ああ。掴まれたところがちょっと痛いけどな。」

ゾンビの服で警棒についた血を拭くトモ。僕は改めて動かなくなったゾンビを観察する。

先ほどは恐怖で働かなかった鼻にきつい腐敗臭が入ってきた。あまりの匂いに思わずその場に吐いてしまう。

「オエエエエエ！！！」

壁に手をついて吐く僕の背を、トモがさすってくれた。

ついに悪夢はその姿を現し始めた。しかし、未だ惨劇は序章に過ぎない……。

第3話・表：「おいおいマジかよ……。」（後書き）

最近めっきり書けなくなってきました。更新が遅れていく……。

第3話・裏：「……………一体ここは何をしていたんだ……………」(前書き)

前回の更新から1ヶ月経過してます……………。

……………マジへこむ。

第3話・裏：「……一体ここは何をしていたんだ……？」

人の暮らす温かみが全く感じられない廊下に、私達が走る音だけが響いている。

時折銃声も響くが、それもすぐに止んでいく。

「……一体ここは何をしていたんだ……？」

私……コレス・レンダーの数歩前を先行している、この部隊で只1人の日本人であるイクタが曲がり角の向こうを偵察しながら咳いている。

その疑問は私も感じている。幾度と無く現れてくる重装備の警備員達に、明らかに単なる研究施設には見えないこの地下施設。

そして、先ほどから一向に離れない、何か巨大な猛獣に狙われているかのような感覚。

ここに何があるのだろうか……。

しかし、そんなことを考えるのは私達の仕事ではない。

「そんなことは関係ない。我々は任務を遂行するだけだ。」

「……確かにそうだが……。」

私の言葉に、イクタは煮え切らない様子でぶつぶつと呟いている。正直、私も彼のことは言えないのだが、我々はプロなのだ。いちいち自分達の与えられた仕事に考えるようでは戦闘時に支障をきたしてしまう。イクタもそれを承知しているからこそ反論しないのだ。こうしてイクタの口を塞いで、私は黙々と施設の奥へ足を進めていった。

「……これで何回目だ？ 階段下りるの？」
「……4回目。」

この施設は随分と広いらしい。フロアを大雑把に歩き回って調べ、何も無い場合はすぐに階下へ向かう、という手順を何度も繰り返している。いい加減辟易してきた。

それでも油断はせず、しっかりと警戒を怠らないようにして下に下りていく。

「な……。」
「これは……。」

階段を下りてフロアに着くと、二人とも驚愕の声を上げてしまった。

今までもフロアはただ廊下があるだけで、たまに部屋などがあるだけだったが、この階は違う。

下りてすぐに、左右に透明なガラスで出来ている壁の向こうに様々な研究機材が並んでいる。良く見ると、奥にはまるで人体標本のように肌がむき出しの人間が手術台のような物の上に横たわっている。恐らく生きてはいないのだろう……。

まるで漫画にでも出てきそうな豪華な設備だったが、通路にはさらに異様なものが広がっている。

「何だよこの量は……。」

イクタが呆然としている。私も余りの匂いの濃さに顔をしかめながら手で鼻を押さえている。

通路には、バケツでぶちまけられたかのように膨大な量の血が飛び散っているのだ。血は床だけでなく壁にも飛び散っており、よく

見ると壁には血で作られた手形もある。力尽きる寸前に壁に手をついたのか、手の跡が床の方へと続いている。まるで壁にもたれながらゆっくりと倒れていったかのように。

これほど酷いものは初めてだな……。私は若干気分が悪くなったが、それを決して表に出さないようにしつつ床や壁を調べる。壁には上半分がガラスになっていたが、大量の血のために中の様子を確認することは出来なかった。イクタも警戒心をむき出しにして辺りに目を向けている。

「これは1人2人何て量ではないな。だが、死体はどこだ？」

そう、何故かここには死体が転がっていないのだ。私は通路に見落としている場所がないか確かめてみるが、通路には遮蔽物はなく一人の死体が隠れられそうなお手紙はない。

(そんなバカな……。死体だけを持っていったとしても？ なら何故これだけの量の血をここに……。)

「おいコリス、ちょっと来てくれ。」

考えがまとまらないうちに、突然先に進んでいたイクタが私を呼んだ。何かを見つけたらしい。険しい顔でなにやらその場にしゃがみこんで床を調べている。

「どうした？」

「……。こいつを見る。」

イクタが指を指す。私がイクタの示す場所へ目を向けると、血で出来た足跡がフロアの奥へと続いていた。

微妙に足を引きずった跡が残っている足跡を見て、私は驚くしか

ない。

「これは……。」

「おかしいだろ？ これだけの出血をしているのに、まだ動けるなんて。しかも足に怪我のおまけつきだ。」

一体、ここで何があったんだ……？

得体の知れない不安が徐々に私の心に侵食しようとしてくる。それを意思の力で封じ込めると、私は一旦連絡を行うために耳につけてある無線機のイヤホンに手を当てた。

「ビット2よりビット1へ。たった今何かしらの研究が行われていたと思われる階層についたが、どうやらここで何かがあったようだ。床に大量の血痕が残っている。そちらの状況は？」

隊長であるジェイ・ケンリーへと無線を繋げるが、向こうからの応答が無い。

「？ ビット2よりビット1へ。どうかしたのか？」

念のためにもう一度呼びかけるが、やはり応答は無い。無線機の故障か？

「イクタすまない。私の無線機が故障しているようだ。」

「分かった。こちらビット2。誰か応答してくれ。こちら……。」

私の代わりにイクタが無線を行っている間、私は何気無く血で出来た足跡の先を目で追っていく。

すると、足跡はしばらく通路を進んだ後、とある部屋へと入っていた。

その部屋には『休憩室』と書かれたプレートがドアに貼ってある。何故その部屋へ向かったのかは不明だが、怪我人である以上遠くへはいけなかっただけなのかもしれない。その場所はさほど離れた場所ではなかったからだ。

しかし、私は何故かそこから嫌な雰囲気を感じたのだ。何故かは分からない。ただ、後から思えば私の第六感だ告げていたのだろう。そこに近づくなど。

今の私にそのことが分かるはずもなく、私は支給されたアサルトライフル・X M 8を構えつつ、その部屋へ近づいていく。

背後ではようやく他の仲間が呼びかけに応じたらしく、イクタが若干声を大きくしながら話している。

「トウジヨか!? . . . ああ、こちらは無事だ。そっちは? . . .
. . . そこまで進んでいたのか? . . . 隊長から何かなかったか?
いや、こちらから呼びかけても応答が無いんでな。聞いてみたんだが? . . . そっちもか。何? 研究員に気をつける? どうゆうことだ?
? おい! ? くそっ。」

部屋へと向かう足取りを一定に保ちつつ聞き耳を立ててみると、どうやら繋がったのはトウジヨらしい。だがイクタの口から出た断片的な言葉から推測するに、あちらは何かトラブルに巻き込まれているようだ。

(隊長は応答しない? トウジヨも、イクタの様子から緊急のことがあったために通信を切ったようだが、あちらはそんなに切羽詰っているのか? . . . ? それに、『研究員に気をつけるとは一体?)

私は特に、『研究員』についての部分が気になっている。この廊下にある血は一部が乾き始めていることから、恐らくはこの人間

のものなのだろう。実験設備が揃っているこの場所にあるということとは研究員のものだという可能性が高い。

ならば、この研究所で何かがあり、それにより研究所の職員が殺害されたと見るのが妥当だろうか。

だが、それならばここで何が起きたのだろうか。また、この惨状を作り上げたのは誰だ？ それに何のために……。

……ダメだ。分からないことが多すぎる。このまま考え続けても意味は無いな。

そう思うと、私は即座に思考を切り替え、もう目の前にある足跡が入っていった部屋のドアを開いていく。

「!?!? コレスお前何を……!」

後ろからイクタの驚愕の声が聞こえてくるが、私はそれを無視する。この中に何かがあるのか、それを確かめておかなければ危険だと勘が告げているからだ。

私は利き手である右手でXM8のグリップを握りつつ、左手でゆっくりとドアを開けていく。半分ほど開いたドアから見えたのは、血の海に横たわっている誰かと、その体に馬乗りになって顔を異様なまでに横たわっている体へ近づけている血塗れの白衣を着た何者かだった。

(何をしているのだ……?)

相手を刺激しないよう声を出さずに完全にドアを開ききると、白衣の男が何をしているのかが分かった。そして、信じられないものを見ている私は顔を歪める。

何故か白衣の男から聞こえてくるくちやくちやという水つばい音。その音とともに床に広がっていく血。

白衣の男は、横たわっているもう一人の男を食っていたのだ。

第3話・裏：「……………一体ここは何をしていたんだ……………」(後書き)

これでようやくゾンビが出始めました。

今1話に二つの視点を入れていたのを、1話づつに変えたのは、それぞれの視点によるゾンビとの遭遇を1話に纏めると長くなりそうだったからです。

次回はまた2つの視点を一緒に入れていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382e/>

DEAD・END・RUNNING ~アナザーストーリー~（休載中）

2010年10月11日11時40分発行